

中国温泉探訪記(1) 江西省廬山温泉

桂 博 史¹⁾

1. 温泉大国

ここ数年中国で温泉が大ブレイクしている。いたるところ温泉開発が計画され、現にいくつもの温泉レジャーランド(度假村という)やキンキラキンの大ホテル(大飯店という)が建設されている。当初は大都市の郊外ばかりであったが、今ではどうしてこのような奥地に、と思うほどの都市からは離れたところまで開発の手が伸びてきている。

中国のローカル温泉を巡って年寄りの話などを聞き集めている筆者には、なんとも複雑な思いが湧く。そこで、上海からそれほど遠くない、文化人類学的に言うと、漢民族の農耕社会のなかにあった、歴史的な温泉を二つ紹介しながら、中国温泉について、右往左往しながらの探訪の記録を披露したいと思う。

1.1 日本の文化性

中国に水温25℃以上の温泉が多数存在することは、地熱研究者には既知の事実として知られたことだ。しかしながら一部の人びとを除いて、温泉大国の温泉好きを自認する日本人の多くは、そのことを知らない。年間200万人以上もの日本人が訪れる文化的に密接な隣国でありながら、これはどういうことなのだろう。

それについていま詳細を論ずる紙数を持たないが、近代に入ってからの、日本人の誤った温泉感と知識によるところが大きいのではないかと思っている。むしろその温泉感と知識は、中国どころか日本の温泉に対してさえ、怪しい。

現在、温泉文化をテーマに標榜している書籍や講座などがあるようだが、筆者の目にしたそのすべてが、つまるところ旅館の紹介である。日本独特の



写真1 廬山温泉へ行く途中の見逃してしまうほど小さな道しるべ。冬は毎朝霧が巻く。

温泉旅館は温泉をもとにした派生的文化の一面ではあるかもしれないが、およそ温泉そのものとは関係ないものである。

また温泉の歴史を説いたという書物も出ているが、一例をあげれば、現代の温泉法による温泉の概念をもって歴史上の温泉を論ずるという、裁判であれば即座に却下されてしまうような、歴史というには取るに足らない粗論が展開されている。

バブル以降の温泉ブームの中で、このような粗雑な考えが堂々とまかり通ってしまう現状を、筆者はたいへん危なっかしいと感じている。

1.2 日本温泉文化の属性

日本流の温泉文化論が、たとえ温泉旅館という卑小な形でしか論じられなくても、それが日本国内という内側に向いているうちはいいが、外国にまでこれを普遍的なものとして持ち込もうとなれば、話はまったく別である。

先日、テレビ番組の特集で、中国の温泉開発をした日本人をルポルタージュしていた。大きな露天風呂に入浴したりする習慣がない中国人には温泉文

1) 温泉民俗研究, ジャーナリスト:
hello@katsura-works.com

キーワード: 日本温泉史研究の不在, 歴史的温泉文化, 中華人民共和国江西省, 温泉, 開発, 療養院, 日本人, 温泉旅館

化がない、われわれが温泉文化を付与するのだと、日本流の温泉旅館を中国東北の大連近郊で開発したその北海道の観光業者は、意気軒昂であった。

しかし温泉とは温泉であって、温泉旅館ではない。これは人間の温泉を観察する上で、重要なファクターである。

残念ながら、温泉大国を自認するわれわれは、きちんとした温泉と人間の関係＝温泉民俗の文化史に取り組み姿勢に欠けていると言わざるを得ない。

話を中国に進めたいのだが、なぜこのようなことを書いてきたかという、このファクターに気がつかないと、あまりに身近な国ゆえに、長い歴史のある多くの中国の温泉の文化を理解できないからだ。

結論的にいえば、中国にも温泉の文化はあった、むしろ日本以上に重い歴史があったといつてよいだろう。この20～30年、社会的関心が温泉に向かわなかつただけのことだ。それゆえ中国の温泉に取り組むためには、現在の日本のような、温泉旅館を主体とするような利用法を念頭に置くと、中国に温泉文化がないという錯誤に陥りかねない。われわれの中にある先入観をまず排除しなければならぬから。

2. 広い中国

中国には現在3,000あまりの温泉があるといわれている。その数は年々増えている。増えている原因の大半は、ボーリングによる新温泉の発現によるものだが、広い中国ゆえ、まだまだ自然湧出温泉が発見されることも多い。また、この温泉数は政府が管理・掌握している温泉の総数であるが、実数はこれよりはるかに多いのではないか、という話もよく聞く。中国の温泉は断層性の温泉であるから、地下の情報が公開されているところは探索が比較的容易である。政府が、10本の温泉があるとしたある温泉町を擁する地方では、数十平方キロにわたって130本を超す温泉井が勝手に掘られている、という新聞記事を旅の途次に読んだことがある。

そのような状況のなかでも、中国の人たちが中国を代表する温泉として自慢するのは、間違いなく唐の都であった現在の陝西省西安市郊外にある、歴史的な名称を華清池(Huaqingchi)という麗山

(Lishan)温泉(ついでながら温泉はそのままWenquanという)である。秦の始皇帝以来の皇帝の浴用温泉としての記録がある。現在は玄宗皇帝の華清宮の浴槽も発掘され、その当時の面目が復元されている。ここは始皇帝陵や兵馬俑博物館にも近く、訪れる日本人も少なくない。

2.1 お国自慢、第2の温泉

では第2の温泉はどこか、そういうと、洋の東西を問わず、訊いた相手のお国自慢が始まるものだ。ローカル色が出てくる。おそらく広い中国ではなおさら、いくつも名が挙がるだろう。そしてたいていの場合それぞれが言う温泉地に、名を挙げた本人以外行っていないというのも、広い中国ではごくあたりまえのことだ。

いまここでは歴史的民俗を通して中国の温泉を見たいので、筆者は江西(Jiangxi)省の廬山(Lushan)温泉を中国第2の温泉としてあげたい。その歴史的知名度によって、おそらくは中国の人々からも、そう激しい異論は出ないだろう。そして続く第2回では、同じ江西省の中の、未開発の農村の温泉を取り上げてみたい。

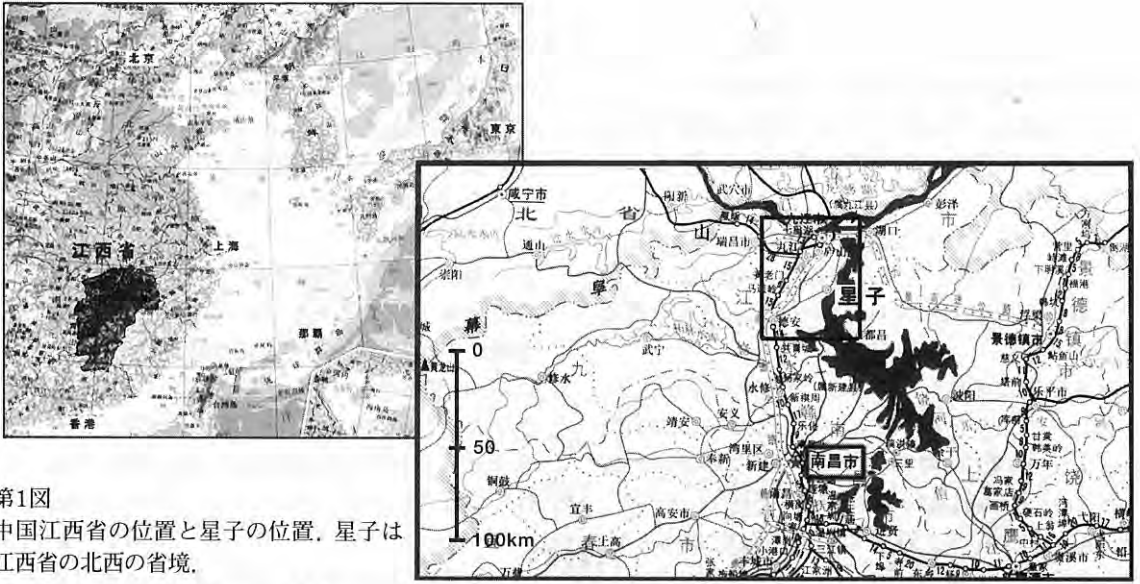
3. 江西省

江西省は、大きな省である。上海からそれほど遠いわけではないのだが、日本の企業進出も少なくまた日本人の関心を引く観光地も少ないので、日本人にはなじみのないところだ。江西省のもので日本人が唯一知っているとするれば、景德鎮窯であろう。

省の顔ばせは、中国大陸を連想させる平原ではなくて、山また山の起伏の連続である。道教の発祥地といわれているのも、この江西の山である。

中央北部には、多くの水が集まり鄱陽(Poyang)湖となって、北の端に流れる長江に通じている。そしてこのあたりに世界文化遺産にも指定された名峰廬山がある。廬山は詩人陶淵明(365-427)の故郷である。

日本人にはなじみがないと書いたが、中国の人々にとって江西省といえば、日本人には計り知れぬ思いがある。毛沢東・周恩来らが初めて蜂起し中華ソビエト政府を作った、中国革命の根拠地、



第1図
中国江西省の位置と星子の位置、星子は江西省の北西の省境。

人民中国の原点の地なのである。

中華人民共和国が成立してからも、毛沢東の時代には、夏の間だけ廬山に政府が北京から移ってきていた。

その廬山の南側に、温泉が湧き出していた。中世には黄龍霊湯泉と呼ばれていた。現在は1950年代に建てられた工人療養院に温泉は集約されている、と、ここまでは予備知識である。

4. 廬山温泉

4.1 位置

廬山温泉は江西省星子(Xingzi)県というところにある(第1図)。廬山温泉とは言いながら、廬山山中にあるのではなく、少し離れている(第2図)。これをなぜ廬山温泉というかには論があるが、今回はその説明は省く。

廬山がおよそ1,000から1,474メートルの山なのに対して、温泉の標高は50メートル。星子-徳安断裂上にある。表層土の下は雲母石英片岩、その下に花崗岩層がある。廬山温泉の成因については早くから華東地質によって調査研究が行われている。華東地質については次回詳しく説明するが、今は結論だけ記すと、廬山のおよそ標高1,000メートルあたりの降水が、北北東方向の贛江(Ganjiang)断裂を熱源として、20~30年かけて温泉水となって出てきていることがわかっている。



第2図 廬山温泉の位置(概略図)、第1図右図の枠線内の拡大。廬(正字体)=庐(简体字)。

かつて中国に今のような詳細な地図が一般向けに出ていなかったころ、旅行者向けの簡単なイラストマップに、線路際の温泉の印を見つけて、上海から武漢へ向かう列車の窓から、湯気でも立ち上ってはいないかと、ひとり目を凝らしていたのを覚えている。実際は線路から20キロ以上も離れていたのだ。いまとなっては笑い話である。



第3図 廬山温泉療養院内配置図(創業時, 1マス100m).

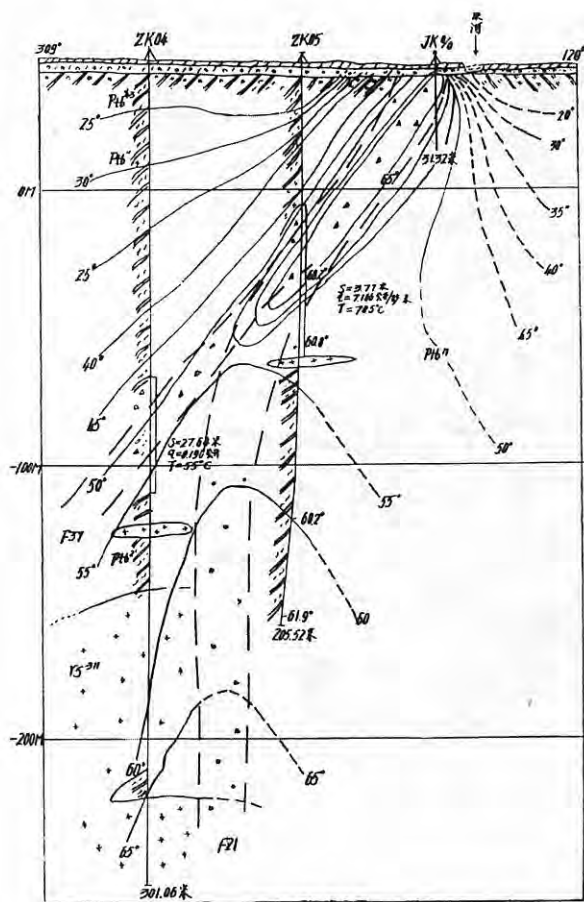
4.2 療養院

廬山温泉へ行くには省都南昌(Nanchang)から星子行きのバスに乗る方法もあるが、われわれ日本人には京九鐵路德安(Dean) 駅からタクシーで行くのがよい。

人家もまばらな寒村を走り抜けていくと、見逃してしまうほどの小さな『温泉』という道しるべがある(写真1)。見ればすくすくと伸びた大木が道に日陰を作るあたり、高い塀を廻らしそびえる立派な門のまるで城郭が現れる(写真2)。これが廬山温泉の主体、工人療養院だ。門前には、粗末な安宿や飲み屋雑貨屋が数軒ある。療養客相手に昔農民たちが



写真2 廬山温泉入口の立派な門。



第4図 地熱図断面 (第3図中の地熱図断面位置)。

始めたらしい。

廬山温泉は太古より国(諸侯)の所有であった。廃れた時代もあったが、封建時代にもたびたび公による施設の建造が行われ維持されていた。中華人民共和国成立後は、各地で湧出量が安定し療養効果が期待される温泉を、労働者のための療養施設として利用することが求められた。まだ中国がたいへん貧しい時代である。ここ江西では職工の労働組合である江西省总工会の資金によって、廬山温泉に工人療養院が設けられた(第3図)。

4.3 2002年夏

筆者は昨夏2度目の廬山温泉を訪れた。

以前は冬、今回は夏であった。

中国の人たちは、少なくともいまこの季節は、温泉に入ることはない。広い院内に人の姿はなかった。

院内には2階あるいは3階建の建物がいくつもあつた。もとはそれぞれ目的別に建てたらしいが、すでに温泉療養が盛んな時代は過ぎて、それぞれが普通の宿舎になっていた。温泉客が最も多いはずの冬に来たときでも、部屋の半分も客はいなかった。

それにしても、たった数年で院内はずいぶん変わってしまった。「温泉賓館」だの「貴賓楼」だの看板が院内に立ち並び、俗悪な雰囲気が立ち込めていた。たしか八号楼といっていた門に近い建物は、いつのまにか温泉山庄と名を変え、建物の外観もすっかり変わり、無線機を持ったガードマンが巡回をしていた。

5. 中国温泉の伝統

5.1 三号楼

私が目指したのは三号楼という、いちばん奥にある現存のいちばん古い建物で、療養院建設当初の面影を残している。

三号楼では入り口まで行くと、こちらは気楽な服装の係の女性が出迎えてくれたが、私たちが外国人だとわかると、困ってしまった。支配人はいま出かけているので、自分では泊めていいのか判断ができないという。それを無理に押し切って、部屋に案内してもらおう。

三号楼は、もともとは皮膚病療養棟として建てられたものである。廬山温泉は、太古より皮膚病の温泉として尊重されてきたわけであるから、この棟は全盛時は廬山温泉の真骨頂であったはずだ。

皮膚病を扱うので、大浴場では具合が悪いので、ツインの部屋に(写真3)、半世紀前の中国のこのよ



写真3 廬山温泉三号楼の客室。1泊100元ほどだった。

うな田舎としては画期的な、温泉浴サニタリーを備えた、ヨーロッパの温泉保養地を理想に、研究に研究を重ねたらしい、浴槽などはもしかすると、ヨーロッパからの輸入品かもしれない。写真4をご覧くださいとわかるだろうか、風情はまったくくない、それどころかむき出しの便器に嫌悪を覚えるかもしれないが、西洋式の横臥浴式の浴槽と、壺状の水洗便器が並び、その便器の真上に温泉シャワーが設けられている。便器をまたいでシャワーを浴びようになっている。便器を主たる排水設備としたのだ。

このようなところに果たして外国人が泊まれるのか、受付の女性は真っ先にそう考えたのだ。



写真5 任さん(右)と筆者(中央、左は筆者の妻)三号楼前にて。

5.2 温泉に求められた効能

中国では温泉療養の対象は圧倒的に皮膚病対策と、運動機能回復が多かった。今でもそうである。日本のような血行だの消化器だのといった話は聞いたことがない。そういう症状は漢方だの薬膳で直せばいいというのが、中国の伝統的な庶民の常識であった。加えて、過度に皮脂を落とすことは、新たな不健康につながるという伝統的な考え方もあり、沐浴に抑制が働いているといったほうがいだろう。

したがって、温泉施設といっても、特に各地の温泉療養院ではシャワーであることが少なからずある。そして最近では、温泉浴用施設はプールのみという大飯店も増えた。

中国に暮らす人でさえ、中国人は裸で温泉に入らない、などというようになったのは、そのため



写真4 皮膚病療養棟として建てられた三号楼の部屋に付いている温泉浴サニタリー。写真では切れているが、上に温泉シャワー装置がある。

ある。

明の李時珍編纂の、人間のための書といおうか、漢方集成である「本草綱目」(1578年完成)は、日本でもつとに有名だが、廬山温泉の効能を載せるこの書でさえ、伝統的な考え方は、食餌療法と経口漢方薬であることを見ることができる。この点なんでもかんでも温泉で直せると信じた近世日本などの、温泉湯治場とは温泉のあり方が、似ているようで、すでに異なっている。

夕方、任 光慶(Ren Guangqing)支配人が現れた(写真5)。華東地質の孫教授の門下生である。「フロントの女の子が、「外国人が来て泊るといっている、どうしたらいいのか」と困って電話をかけてきた。でもそれを聞いて私はすぐにあなたたちだとわかりましたよ。こんなぼろ宿にわざわざ来てくれる外国人は、あなた方しかいない。よく来てくれました」

しばしの再会の言葉の後、「ここはこの1年半、ものすごい変化があった」そう言って、任さんはこころもち肩を落とした。

6. 市場経済化

6.1 中国温泉の新しい意味

夕食をともにしながら、任さんはものすごい変化を話してくれた。50年という期限をつけてはいるものの、事実上江西省は療養院と温泉権を丸ごと香港の開発業者に売ってしまったのだ。改革開放市

場経済の具現である。彼の任務も今年いっぱいということになった。

「あなたたち日本人は、自分のお金に余裕があれば温泉に行こうと思うのかもしれない、しかし中国人は違う。いまここに100元あったら、中国人なら100人中100人がレストランに行く。温泉に行くことはない。中国では温泉は会社の金や組織の金で行くところだ。自分の金で行くところではない。だから、温泉施設に公金をかけることが、大衆のためになるというわけではないんだ。企業や組織の利用が圧倒的である以上、いまは会議場のない温泉施設はだめなんだ。ここはもう省がちびりちびりと資金を出しても、改善が望めないということになったのだ。省は伝統的なありかたに見切りをつけたのさ」

彼の言うことは間違いなかった。大温泉地の施設は、軒並み大会議場をいくつも備えた大ホテルである。そして特徴的なのは、そういうホテルの多くが、銀行が直接投資して直接経営していることだ。それが顕著なのは、安徽(Anhui)省の半湯(Bantang)という古い温泉地だ。

九号楼は昨年すでに温泉プールになって、八号楼だった温泉山庄はもうすでにここを買った香港企業の手によって運営されている。

三号楼から離れたところに、独立した入浴施設だけの水療楼がある。古くからあった施設だ。今は閉められているが、以前来たときは開かれていて、入ると深い歩行浴槽があった。温泉療養全盛の昔は圧注浴器械や噴霧浴器械などあったようだが、いまは撤去されてしまった。歩行浴槽はひとり一時間20元、借り切ると400元もする。このあたりの農民の年収が600元あるかないか、勤め人でも月給が600から1,000元くらいという話も聞いたので、べらぼうに高い。

温泉はもともと個人ではとても利用することはできない費用のかかるものだったのだ。そこに市場経済が持ち込まれた。

6.2 日本のお客さん

翌朝、温泉山庄に行ってみた。総支配人だと言う青年が筆者たちを外国からの旅行者と見て取って、すばやくやってきた。

「日本で暮らしたこともある香港人のボスが、広

東省の珠海で御温泉という日本式の大きな温泉保養施設を作り大成功した。僕は安徽の半湯温泉で開発を手がけ、いまはこの開発に派遣されたんです」

「ずいぶん若いが、君はいくつなのですか?」

「24歳です。最初は医療専門学校に通っていたのですが、開発を手がけたらそちらのほうが面白くなってしまい、この仕事をしています」

「ここは南昌からも近いし上海からも来やすい、夏は香港から廬山空港まで空路が開かれる。プールも作ったし、これから日本式にして露天風呂を中庭に造るんです。日本人のお客さんをどんどん呼ぶんです。大勢来るでしょう」

日本人の私たちに、日本へ来たことがない彼が、日本式温泉を一生懸命語るのがおかしかった。しかしこれが中国のパワーである。

「三号楼はどうする?」

「ああ、あれは今年の暮れまでで、按摩楼に変えます。あそこにいる連中は、全員クビにします」

容赦ないこの青年は、任さんのおよそ半分の歳だが、任さんに倍する給料を得ているだろう。これも中国の開発の一面である。

その昔、彼が本拠にしている温泉山庄の八号楼は按摩楼であった。しかしマッサージという仕事のきつさに働く者が次々と去って、按摩療法をやめてしまった経緯があることを、この青年はまだ知らないようだった。

6.3 開発者の本心

彼はぜひ温泉に入っていけと勧める。ここは大風呂はないので、いちばん浴槽の明るい部屋の温泉に入った。どうと言うことはない、どこにでもあるタイル張りの浴槽である。温泉も三号楼と同じ。

30分ほどで出ると、如才ない彼は

「これからは日本のお客さんがたくさん来るでしょう」と言い、茶を出しながら、入浴料としてしっかりこの部屋の1泊分150元を請求してきた。

中国で多くの温泉開発は、中外合資あるいはまったくの外資である。地元政府は出資者に対し、たいていは償還10年を謳っている。しかし事業関係者からは、温泉ビジネスはこのような時間をかけた生ぬるいものではないとも聞く。短期間に大資本を投下し短期間に回収する。実際は10年どころか



写真6 農民用の共同浴場。冬の間だけ浴槽を満たす。

5年目にはもう出資金も回収し儲けが出る、10年経ったころには、売り飛ばすというビジネスを考えている、というのである。これが現在の中国温泉開発である。

按摩と計画していても、実際にできるのかどうか。極論すれば、カジノに替わってしまってもおかしくないのが現状である。

6.4 重い温泉

三号楼のさらに片隅には農民用の共同浴場(写真6)があった。以前は温泉水がためられていたが、いまは空で、こしばらく使われていないようであった。ここだけは療養院を建てるときの農民との協約で、無料である。しかしボーリングしてからは、費用のかかる動力を使って配泉するので、流しっぱなしではない。冬の間だけ、しかも浴槽を満たすだけの量を流してその日は終わりである。

入浴施設と言えば、初めてここに来たときに、中庭のまんなかに、妙な深い石造りの大きな桝と、石をオブジェにして囲った空の池があることが気になった(写真7)。

任さんは、ここが源泉で、このような形で自然湧出していた。療養院ができたときにこのように庭園風に囲ったが、まだ温泉が自然湧出していたので、人々はここに直接入っていた、と言った。

今はコンクリートで固めてしまった池の底は花崗岩の岩盤であり、そこから温泉が湧き出し、その湯量はこのような大池で均衡がとれていたのだろう。

250床から始めた療養院は、拡張を始める。それに伴い温泉量が足りなくなり、早くも60年代早々にボーリングを始める。82年には180メートル掘り下



写真7 かつて自然湧出していた温泉の源泉跡。これらもやがて埋められてしまうのだろう。



写真8 清時代の浴槽跡。旧日本軍によって破壊されてしまった。

げた。

「掘削井から温泉が出ると同時に、この池の温泉が完全に枯れた」と任さん。となりの切石造りの正方形の桝の前(写真8)で立ち止まり、

「これは清時代の浴槽だ。日本の鬼どもが、ここまでやってきて、この温泉を見つけて喜んで入っていた。人民から取り上げておいて、負けて帰るときには破壊していった」

と、私と目を合わせることもなく吐きすてるように言った。

冒頭で、中国に温泉があることは、地学者と一部の人が知っている、と書いた。そう、一部の人は、中国侵略をした旧軍人軍属そして諜報関係者たちである。

重い話になるが、旧軍は実によく中国内の温泉を調べ上げていたようだ。接收し軍病院にしたり、近くに慰安所を作ったりしていた。解放後温泉が大きく開発されたところはまだしも、農村部ではそういう日本軍の行為がいまだ忘れられてはいない。温泉にはしゃぐ日本人を、彼らがどう見ているのかを、中国温泉を巡る日本人は心しておかねばならな

い。

今回は日本人が来たことがないという農村の温泉を紹介する。

- 1) 会話は中国普通話でしている。江西省で英語・日本語はまったく通じない。農村部にはたいへん強い方言がある。なお、廬山は簡体字では庐山と書く。
- 2) 人名地名のアルファベット表記は中国国標(拼音)に基づく。なお余談ながら、拼音は正確にローマ字に対応しているが、台湾ではそれが無い。台湾の中でも拼音が優れた表記法なのでそれをしようという動きがあるが、まだ決定的ではない。いまのところ各人がそれぞれアルファベットを勝手に充てているので、台湾のローマ字表記には統一性がない。台湾製のローマ字地図では本文の地名が見つからない可能性もある。
- 3) 朝日新聞社刊朝日選書「陶淵明」は、廬山温泉の記述がある数少ない図書であるが、その描写が実情とも過去の様子にもあっていない。人を介して著者に問うたところ、現地に行かずに書いていることが明らかになった。
- 4) 参 考 文 献
 - 中国の温泉のシステムについては、「中低温対流型地熱系統」汪 集暘(Wang Jiyang), 1993, 科学出版社。
 - 廬山温泉については、「中国廬山温泉」周 仲堯, 艾志林, 陳 公明, 李 明裕, 黄 承中, 1985, 工人出版社。
 - 「本草綱目」廬山有温泉, 方士往往教患疥癬風癩, 楊梅瘡者飽食入池, 久浴得汗出乃止, 旬日自愈也。
 - 廬山温泉と廬山温泉の古典的關係については、白樂天の815年ころの作である、廬山の下の温泉に題する詩「一眼湯泉流向東 浸泥澆草煖無功 麗山温

水因何事 流入金鋪玉甃中」がある。これは実際に当地へ来て詠んだものである。意は、“あるひとつの泉源から温泉が湧き、太陽の昇る方向へ堂々と流れている。しかし惜しいかないたずらに泥にまみれ草を暖めているだけで役に立っていない。同じ温泉なのに麗山の温泉はなぜ皇帝の華清宮にまでなったのか。無為に流れる廬山の温泉に対し、麗山の温泉は晴れがましく黄金の敷物玉の敷物に流れてはあたる”。これは白樂天がこの地に流された嘆きを仮託しているのであるが、下地には麗山温泉と廬山温泉は泉質が同じであるという太古からの伝説があるようだ。

1964年の温泉水の分析と調査結果は、(現在はボーリングをしているため値が異なる)1リットルあたり、 $F=12\text{mg}$, $\text{SiO}_2=45\text{mg}$, 残留鉍物量(鉍化度)343mg, $\text{HCO}_3=62.35\text{mg}$, $\text{CO}_3=8.32\text{mg}$, $\text{Na}=96.00\text{mg}$, 水温 65°C , pH 8.5, 日湧出力450t, 鉍化度はやや高いが、中国の温泉の見本のような数値である。日本の温泉分析表の分類で書くとアルカリ性単純温泉、しかし日本流では中国の温泉の大半が単純泉にくくられてしまうので、中国の水文地質学的にももう少し詳細を記すと、高温アルカリ性低硬度含珪酸フッ素重炭酸ナトリウム温泉である。なお主井である最深度の6号井からはラドンが多量に含まれた 70°C 超の温泉水が出ている。

- 5) 三号楼は按摩楼になることなく完全に取り壊され、レジャーホテルになって2003年4月10日開業。
- 6) インターネットで廬山温泉を検索すると、全く同名の台湾の廬山温泉が出てくるので注意のこと、こことは全く関係がない。

KATSURA Hirofumi (2003) : Topography of historical hot spring in China- (1) Lushan Wenquan.

<受付: 2003年4月15日>